

円環の呪縛

—— マンフレッドにおける抑圧の心理分析 ——

門 田 守

バイロン George Gordon Lord Byron (1788-1824) の『マンフレッド』 *Manfred* (1816-17) は強烈な自我意識に捕えられ、人間や自然との融和的関係をも与えられない孤高の魂が死に至るまでを描いた詩劇である。主人公マンフレッドは回りの見るもの全てに自分の内面状況を読み込んでしまうという、膨張した自我の牢獄的世界の内側に捕え込まれている。そのような己を円環的に取り囲む呪縛は、彼の過去の生活に対する後悔の念、とりわけ恋人アスターティ Astarte を殺したという罪の意識によって生成されている。マンフレッドは彼女に己の犯した罪の赦しを乞うことによって、この呪いの円環からの脱出を試みるのである。

このように、彼に懊悩の日々を送らせている原因はアスターティなのであるが、彼女は一体いかなる女性であろうか。私は彼を苦しめるこの「運命の女」の実体を探ることによって、謎めいた過去と憂鬱そうな相貌で特徴づけられる、典型的なバイロニック・ヒーロー⁽¹⁾であるマンフレッドが、ロマン主義時代に登場しながら実は近代人としての苦悩を背負っていることを論証したいのである。それはエロスとタナトス⁽²⁾の間で震え戦きつつ暮らさねばならない神経症者の苦悩である。その際に劇のプロットに従って、主人公の陥っている苦悩の分析、その苦悩がいかに発生しているかの解明、そしてその原因であるアスターティの正体の暴露という具合に議論を進めていくことにする。これらの3段階の議論において、それぞれナルシズム的な空間的円環、抑圧が回帰する時間構造としての円環、そしてエロスとタナトスの円環がマンフレッドを幽

閉しているのが確められる。しかしながら、これらの呪縛する円環の中で根幹的なものはエロスとタナトスのそれであり、それらの反価値的な概念を結び合わせている人物がアスターティなのだ、と私は主張したい。さらに、マンフレッドの悲惨な死に方の近代性についても論及したい。

I

劇はマンフレッドの苦悩の様子を描くことによって始まる。彼はあらゆるものに自分の心理状況を投影してしまい、そこに己の姿を見ることしかできないナルシシズム的幽閉状態の苦しみを味わっている。彼は自分の内面の世界をこのように吐露している。

MAN. The lamp must be replenish'd, but even then

It will not burn so long as I must watch :
My slumbers—if I slumber—are not sleep,
But a continuance of enduring thought,
Which then I can resist not: in my heart
There is a vigil, and these eyes but close
To look within ; and yet I live, and bear
The aspect and the form of breathing men.

(I . i . 1 - 8)⁽³⁾

ゴシック風の廻廊において、深夜一人でマンフレッドは起きていて、燈火に油を注ごうとしている。暗闇の中で始まった劇は、そのまま主人公の内面のメタファーとなっている。⁽⁴⁾ 眠れない彼の目は絶えず過去に、つまり内側の世界に向いている。その目が見ているのは汲々として哲学や科学に打ち込んでいる自分の姿であり、善、悪、生命、力、情熱によって翻弄されている人間たちの姿である。しかし彼が社会において経験した、これらの事柄は全て砂地に降る雨のようなもので、彼の心に何らの感慨も起こさせない。さらに恐怖、期待、欲望といった感情も、彼の心は無縁なものとなっている。

I have no dread,
 And feel the curse to have no natural fear,
 Nor fluttering throb, that beats with hopes or wishes,
 Or lurking love of something on the earth.

(I .i. 24-27)

つまり徹底した他人への無関心、外界との情緒的交感を麻痺させられた状態に、マンフレッドは陥っているのである。つまり若干のメタファーを混じえて言えば、強烈な自我があたかも殻のように彼の精神に固着し、外界との交信を否定しているのである。⁽⁵⁾

このように惨めな状態にあっても、マンフレッドは長年にわたる修練によって、自然界の精霊たちを自在に操るというファウスト的能力を身につけている。しかしこの魔術的な力は知の探究というファウスト的文脈から捉えるのではなく、自我による牢獄的状况から逃れるための力というバイロンの文脈において捉えなければならない。マンフレッドは自分の意志の力で精霊たちを動かし、「天空」"Air"、「山岳」"Mountains"、「海洋」"Ocean"、「大地」"Earth"、「疾風」"Winds"、「夜」"Night"、そして彼の運命を司どる星である「第7の精霊」"Seventh Spirit"を登場させる。彼は精霊たちに完全な支配力を行使しているのであるが、どうしても、「自己忘却」"self-oblivion" (I . i. 144) だけは彼らから手に入れることはできない。その理由は簡単に説明できる。つまりマンフレッドは、自然界のエレメントたちに対して自分の心理状況を投影しているだけなのであり、精霊たち自身が既に彼の内面に属しているからである。忘却はおろか死さえも与えられないマンフレッドに対して、精霊たちの1人はこのように答えるしかない。

SPIRIT. We answer as we answered ; our reply

Is even in thine own words.

(I . i. 159-60)

精霊たちの与える返答は、既に彼らの主人公の精神内部に存在しているのである。だからマンフレッドは、己の心の内容が精霊たちにおいて反射しているの

を認めているのに過ぎないのである。さらに、彼に姿を現わせと言われた精霊たちの一人はこう答える。

SPIRIT. We have no forms beyond the elements

Of which we are the mind and principle :

But choose a form—in that we will appear.

(I . i. 181-83)

マンフレッドの呼び声に応じない限りはその姿を現わすことができない精霊は、彼の内面を表象する機能のみを帯びているのである。だからこそ彼に自己忘却を与えることなど、精霊たちにはできようはずがないのである。

マンフレッドがナルシズム的状况に陥り、森羅万象を己との関連系の下に捉えることしかできないことは、精霊たちの中で最も強き者、「第7の精霊」の行為を分析するとより鮮明に理解されるだろう。地水火風の元素以外には形をもたない精霊は、マンフレッドの呼びかけに応じて美女の姿で現われる。彼女を見た彼はこう言って、気を失い倒れる。

MAN. Oh God ! if it be thus, and *thou*

Art not a madness and a mockery,

I yet might be most happy. —I will clasp thee,

And we again will be— *[The figure vanishes*

My heart is crush'd !

[MANFRED falls senseless

(I . i. 188-91)

この詩行と次に「第7の精霊」によって唱えられる呪文との関係を考えて、この女の正体はバイロンの離婚した妻アン・イザベラ・ミルバンク Anne Isabella Milbanke だということになる。⁽⁶⁾引用中“*And we again will be—*”の後に来るのは破綻した2人の関係を修復し、再び幸福な結婚生活を送ろうという趣旨の言葉であろう。この言葉の次に7連から成る激しい調子の呪いが、精霊によって語られるのである。

さて、バイロンの個人的投影を色濃く受けたマンフレッドにとって、「第7

の精霊」が美女の姿で現われ、呪文を彼に語りかけるということはどのような意味をもつのであろうか。マンフレッドの個人的事情については何も知らないはずの精霊が彼の心のわだかまりの原因である女性の姿を取るの、実は彼の心の内容を写し取っているのである。「第7の精霊」は適確にマンフレッドの内面心理を読み取り、極めて劇的にそれを反射しているのである。マンフレッドは自然のエレメントの世界を覗き込み、そこに自分の内面の反映を観察しているのである。自然はあたかも鏡として機能し、主人公を鬱屈した自我世界の裡へと封じ込める。まさに、出口なしの閉じ込めの世界である。彼のこのナルシズム的傾向⁽⁷⁾を確証するためには、彼の呪いの対象である美女への言葉を仔細に見ていかねばならない。

I call upon thee ! and compel
Thyself to be thy proper Hell !

And on thy head I pour the vial
Which doth devote thee to this trial ;
Nor to slumber, nor to die,
Shall be in thy destiny ;
Though thy death shall still seen near
To thy wish, but as a fear ;
Lo ! the spell now works around thee,
And the clankless chain hath bound thee ;
O'er thy heart and brain together
Hath the word been pass'd—now wither !

(I. i. 250-61)

このようにマンフレッドは憎き女を呪っているのであるが、よく見ると彼がこの女を陥れたいと思っている状態にこそ、彼は現在落ち込んでいるのである。我々が既に検討した眠りがなく、己の世界に幽閉されているという彼の内面苦悩は、この呪文が成就しようとしている状態と反響し合っているのである。そ

してこの場面ではマンフレッドは卒倒して床に伏しており、その状態の彼の上に呪文が唱えられるのだから、彼の呪いは反転して自分自身の上に降りかかって来ることになる。呪われている女が呪っている当人の言葉をそのままの形でマンフレッドに反射しているのであり、呪う者と呪われる者が同一の円環的呪縛の下に封じ込められているのである。⁽⁸⁾この円環の呪いは自分で自分を呪うという邪悪なナルシズムをもたらす、自我による自らの緊縛の謂なのである。マンフレッドを閉じ込めている夜の暗闇の世界は、そのまま彼の自我世界の内実を表わしているのである。

II

翌朝マンフレッドはユングフラウ山中の断崖に登り、投身自殺する寸前のところを羚羊の狩人 Chamois Hunter によって救われる。第2幕に入り、マンフレッドは彼によって介抱され元気を取り戻す。この幕の前半は表面的には主人公と狩人との会話を描き、超自然的能力をもつ人間とあくまで世俗にとどまる人間を対比させるのに費やされている。⁽⁹⁾だが、それ以外のこともあるように思われる。たとえばこの2人の会話を調べていくと、時間に関する意識が両者の間で決定的なズレを示しているように見えるのである。彼らの時間意識を比較・分析することによって、マンフレッドは抑圧が回帰する時間構造の中に捕え込まれていることがわかるのである。先ほど調べた呪縛する円環内の彼の受苦は、もちろんある一時点での精神状況を空間的に説明したものである。しかし燈火に向かいつつも己の過去の生きざまを凝視する彼の視線といい、精霊が化けた、彼と過去の因縁によって結ばれた美女が吐くと思われる呪いといい、マンフレッドの苦悩は彼の過去の経験が現在へと反転したものである。さらに言えば、主人公の苦悩を時間軸を加えて論じることにより、先に見た円環世界での苦しみと同種類の苦しみを彼は延々と繰り返して味わってきたことが明らかになるのである。

まずは、羚羊の狩人の時間意識について考察してみよう。狩人の小屋に無事

に保護されたマンフレッドは、自分は長すぎるほどの苦汁に満ちた年月を生きてきたのだと語る。見かけ上、彼は狩人よりも若いはずである。しかし彼は自分をはたとえ若くても味わった苦しみの量の多さによって、平穩無事な人生を送ってきた狩人よりも老いているのだと示唆しているのである。その主張に対して、狩人はこのように答える。

C. HUN. Why, on thy brow the seal of middle age

Hath scarce been set ; I am thine elder far.

(II . i . 49-50)

つまり狩人は人間の若さと老いは客観的に測定し得るものであり、主観的な経験内容は人生の長短には影響しないと信じているのである。彼にとって、時間はただ人間を自然な老いへと導くのみであり、人間の精神の内側での体験を反映するものではない。自分の内面心理の変化によって刻印されていない時間を生きる狩人は、自分の外側を流れる時間に己の身を預けただけの世俗の人間なのである。このことは、彼の心理の内側に決して時間は流れ込んでこないと言い直しても表現できるだろう。

そのような狩人の時間秩序を支えているのは、キリスト教への素朴な信仰である。キリスト教において、人間の最後の時は神が定めておいてくれる。その最後の瞬間に向けて、狩人の時間は直線的に流れて行くのである。彼の観念においては、この世の行ないは来世において償われ、そこで全てが精算されることになっている。人間が関与すべきなのはこの世の領域であり、その先の神の国は人間の思惟が及ばない部分である。そしてこの日常人はそこに入るためには人間は聖者の導きを得、神に跪き、いかなる苦しみにもひたすらに耐えるしかないと信じて疑わない。彼はマンフレッドにこのように論ずる。

C. HUN. Man of strange words, and some half-maddening sin,

Which makes thee people vacancy, what'er

Thy dread and sufferance be, there's comfort yet—

The aid of holy men, and heavenly patience—

(II . i . 31-34)

マンフレッドとの別れの場面でも、彼はこの態度を変えない。マンフレッドを苦しめている呪いを察知しつつも、その呪いの本質を理解できない狩人は、彼に対してその苦悶に耐えよとしか忠告できないのである。というのは、狩人は忍耐と信仰によって人間は神の国へ入ることができるという信念に縋って生きており、現世から来世へと延びる直線的な時間意識しかもっていないからである。

このような狩人とは対照的に、マンフレッドは全く異質な時間意識をもっている。彼においては時間は精神の内側へと侵入して来て、自分の意識の様態がその時間のもつ性質を如実に規定するようになる。つまり時間は内面化され、自分が生きてきた瞬間瞬間における意識の堆積が、他者と共有することのできない「己自身の歴史」を構成するようになるのである。その瞬間の無数の断片がせめぎ合う様子をしばらく観察してみよう。

Now furrow'd o'er

With wrinkles, plough'd by moments, not by years;

And hours—all tortured into ages—hours

Which I outlive! —Ye toppling crags of ice!

Ye avalanches, whom a breath draws down

In mountainous o'erwhelming, come and crush me—

(I . ii . 71-76)

一瞬一瞬が過去と未来へと分節され、現在が入り込む余地がない。現在は過去による痕跡であり、即座に未来へと送り込まれる。この運動は一時も止むことがない。過去への後悔は反転して未来への恐怖となり、恐ろしい混沌が彼の心を支配している。このようにして体験された時間は、その体験の質によって、マンフレッドにとってまことに「拷問によって時代を形成する」(I . ii . 73)ほど長く感じられることであろう。彼においては時間は客観的で自分を押し流す時間ではなく、主観的で自分によって生きられた時間なのである。その故に、彼の時間は自らの精神の内側から生成されるのだと言いかえてもよいだろう。

では、何故マンフレッドは内面から創出され、断片化された時間意識をもつ

ているのであろうか。砂粒のように、さらに原子に至るまでに分裂化した時間を生きる主人公は、狩人に対して自分は積極的に行為することによって時代を作り上げていくのだと言う。

MAN. Think'st thou existence doth depend on time ?

It doth ; but actions are our epochs : mine

Have made my days and nights imperishable,

Endless, and all alike, as sands on the shore,

Innumerable atoms, and one desert,

Barren and cold, on which the wild waves break,

But nothing rests, save carcasses and wrecks,

Rocks, and the salt-surf weeds of bitterness.

(II . i . 51-58)

行為が時間を各時代に画するのであれば、その行為を決定するのは個人の意志であると言えるだろう。つまり意志こそが時間に意味を与えることができるのであり、そのように意味づけされた時間は確実に内的感情や体験の流れを反映しているはずである。すなわち、過去において体験されたある事件に関する記憶が、マンフレッドの意識を通じて連続として流れているのである。その事件とは、彼が恋人アスターティを「手ではなく、心によって」“Not with my hand, but heart” (II . ii . 118) 傷つけて殺害したことである。彼はこの悲劇的事件の記憶を忘却するために努力する。この忘却のための数々の行ないが、過去の悲劇への拘泥りを断ち切り、新時代を画そうとする彼の一連の「行為」のことなのである。これらの行為は共通して、過去の記憶の払拭を目指す後ろ向きのベクトルを有している。逆に言えば、行為によって形成される時間とは、アスターティの殺害という自分の内面に貼りついた記憶を出発点として、それを取り去ろうとする意識の流れの謂なのである。だから結果として、時間はマンフレッドによって内面の奥底から流出しているように体験されるのである。

さらにこの時間が断片化されているのは、彼が恋人の殺害に対して罪の意識を抱いているからである。彼は自分の心の内奥に固着した罪意識を取り去ろう

とするのだが、恐くてそれに接近しつつも離れてしまうという行為を繰り返しているのである。この罪意識に神経症的に拘泥するマンフレッドの内面では、希望、恐怖、絶望という感情が相互に絡み合い、その運動は一時も休まることがない。この休息することのない心理の運動が、分断された時間意識へと結びつくのである。また粒子状になった時間の断片が「全て似ている」(II. i. 54)のは、その各々が罪意識とそれを払拭しようとして失敗した記憶とを一様に反映しているからなのである。

さて、マンフレッドの時間意識における内面化と断片化という特徴を考察することによって、彼が過去のある事件に異常に拘泥していることが明らかになった。今度は、彼の過去に対する意識を分析し、彼が「過去から逃れられない」神経症者であることを論じることにする。⁽¹⁰⁾

我々が既にマンフレッドの内面に帰属していると結論した精霊たちの一人は、次のような時間意識をもっている。

SPIRIT. We are immortal, and do not forget ;
 We are eternal ; and to us the past
 Is, as the future, present.

(I . i. 149-51)

精霊たちの意識はマンフレッドの意識でもあるので、彼にとって未来と同様、過去も現存するのである。しかしながら、全く白紙の未来というものを彼はもち得るであろうか。彼にとって未来は過去の投影であり、常に未来は過去によって先回りされているのではないだろうか。そのことは、精霊たちの力が役に立たないことを知った時の彼の言葉に窺われる。

I lean no more on super-human aid,
 It hath no power upon the past, and for
 The future, till the past be gulf'd in darkness,
 It is not of my search.

(I. ii. 4-7)

過去が暗黒に呑み込まれるとは、それが忘却されることを意味しているのでは

ろう。暗黒の中にあるものは、もはや見出しようがないからである。だから、未来は過去が忘れ去られて初めて探究の対象となるのである。しかしながら我々は既に、マンフレッドにとって時間はアスターティの殺害から刻々と断片化された形で彼の内面から創出されることを、さらにその時間の断片群が互いに似ていることを調べた。とすると、彼女を殺したことを忘却しない限り、彼においては過去が未来を永遠に侵蝕していくことになる。彼が未来において経験することは既に過去の苦しみの刻印を押されており、いわば過去の痕跡に過ぎない。故に、マンフレッドは既に過去に葬り去ったはずの自分を抑圧する罪意識が、再び未来に現出するのを許すしかないのである。この抑圧が回帰する時間構造は彼をして同じ苦悩が経回ってくる円環的な時間意識を抱かせるばかりでなく、反復強迫にとり憑かれた神経症者が生きる時間をも特徴づけるものである。

III

マンフレッドがこのように反復強迫にとり憑かれているのは、彼の内面心理にタナトスが巣くっているからである。本来豊かであるべき情緒が反復強迫によって硬直化と涸渇化を繰り返し、彼は一步一步否応なく死へと惹きつけられて行くのである。しかし、彼には自分の心を開いて結ばれたいというエロスの願望を向けるべき女性アスターティがいる。だが彼女は確かに彼にはエロスの体現として写るのだけれども、実際彼にタナトスを与えたのも彼女ではないか。そもそもエロスの根源はタナトスによって既に汚されているのではないか。以下マンフレッドの内面においてエロスとタナトスの交錯する関係について論じたいが、劇のプロットを追って行く都合上、タナトスから先に始めることにする。

神経症者としてのマンフレッドはタナトスを背負って生きねばならない。彼が強いタナトスに苦しめられていることは、彼が狩人に向かって吐く次の台詞から読み取れる。

MAN. I tell thee, man ! I have lived many years,
 Many long years, but they are nothing now
 To those which I must number : ages—ages—
 Space and eternity—and consciousness,
 With the fierce thirst of death—and still unslaked !

(II . i . 44-48)

このように「激しい死への渴望」(II . i . 48)を抱きつつも、マンフレッドは決して死ぬことができないという呪いをかけられている。パイロンは主人公を不死の人間と設定したことの理由を明確化していないが、その効果は明瞭である。つまり死ぬことができないのは彼が「死」を免れているという謂では全然なくて、むしろ反対に「死」に戦慄きつつも、それに愛着を寄せているアンビヴァレントな心理状況に彼が陥っていることを表わしているのである。そのように自家撞着した態度を理解するためには、アルプスの魔女 Witch of the Alps に救いを求めても得られなかった時、彼が述懐する懊悩に耳を傾けるのが最適である。

In all the days of past and future, for
 In life there is no present, we can number
 How few—how less than few—wherein the soul
 Forbears to pant for death, and yet draws back
 As from a stream in winter, though the chill
 Be but a moment's.

(II . ii . 172-77)

「死」に固執する余り、現在における生の充溢を見失い、過去と未来しか経験できないのは、タナトスに憑かれた人間の特徴である。⁽¹¹⁾そして未来においてもタナトスは存続していくので、マンフレッドは永遠に死へと接近しつつもそれから逃避せねばならないという、タンタロスのそれを思わせる苦境に陥っているのである。

さて、マンフレッドにはこのタナトスの責苦から逃れるための道が残されて

いる。それはエロスの力に縋って、抑圧が回帰する時間構造から離脱することである。エロスの本質とは自己の外側にある他者 / 対象と融合することであるから、⁽¹²⁾エロス願望とはとりも直さず自己を閉じ込める円環世界から脱出を試みることなのである。

マンフレッドのエロスの衝動は彼が美女を抱擁しようとし、和解を乞う場面に最初に現われるが、その大半はアスターティに向けられている。彼に罪意識をもたらしつつも、逆に救済をももたらすかもしれないアスターティは、このような容貌をしている。

MAN. She was like me in lineaments—her eyes,
Her hair, her features, all, to the very tone
Even of her voice, they said were like to mine ;

(II . ii . 105-107)

以上のようにアスターティとマンフレッドの間には血縁関係が暗示され、彼女がバイロンと道ならぬ恋に陥った異母姉オーガスタ・リー Augusta Leigh であることは動かせないようである。⁽¹³⁾

自分を深い後悔の淵へと沈めたアスターティを、マンフレッドは

I have outwatch'd the stars,
And gazed o'er heaven in vain in search of thee.
Speak to me ! I have wandered o'er the earth
And never found thy likeness—Speak to me !

(II . iv . 142-45)

と言うほど、深く愛している。またアルプスの魔女との会話の中で、彼は自分がいかに彼女を熱愛しているかをこのように告白しているのである。

She had the same lone thoughts and wanderings,
The quest of hidden knowledge, and a mind
To comprehend the universe : nor these
Alone, but with them gentler powers than mine,
Pity, and smiles, and tears—which I had not ;

And tenderness—but that I had for her;

Humility—and that I never had.

(II. ii. 109-15)

他者に対して憐れみも、微笑も、涙も、謙虚さももち得ないマンフレッドは、誰とも共感できないという自閉的世界の中で呻吟しているのである。そのような彼も、唯一アスターティにだけは愛情を抱いている。つまり他者と共感し、他者を受け容れるというエロスの衝動の一切を、彼はアスターティに対して向けているのである。

しかし、このアスターティは決してそのようなエロスを受け容れるに値する女ではない。邪神アリマニーズ Arimanes が開いた悪鬼の集会において、彼女は懲罰神ネメシス Nemesis の力によって死者の国から呼び起こされる。だが、彼女はどうしても口を利こうとはしない。マンフレッドが自分は2人分の罰を受けてきたのだと言いつつ、必死で救いを乞う時、アスターティの亡霊はようやく“Manfred! To-morrow ends thine earthly ills.” (II. iv. 152) と答えてくれる。だが彼の地上での苦しみが終わっても、来世での苦しみが新たに始まらないという保証はどこにもない。その点、彼女は決してマンフレッドのエロスを受容してはいないのである。さらに彼女のエロス性へ疑いを挟むと、そもそもマンフレッドにタナトスへと向かう傾向を与えたのは、アスターティその人ではないのかと考えることもできる。マンフレッドにエロスの衝動を抱せたアスターティは黄泉の国から呼び出されるのであるから、既に死んでいるのである。彼女に対して自己を委ねることは、タナトスの完全なる受容でもある。そうであるから、マンフレッドにとってまことに「運命の女」であるアスターティは「死」中の「生」であり、かつ「生」中の「死」でもある。彼女はエロスとタナトスの両面価値を帯びた、「双面神」ヤーヌスの女性なのである。

我々はマンフレッドを呪縛する真因をつきとめようとする際に、自分で自分を呪う状況をもたらしめている具体性のある空間形象としての円環、彼の内面で抑圧の回帰を許す時間構造としての円環というように、次第に深度を増して彼の病理を分析してきた。そして今、彼の呪いの基底にはアスターティという

女性があり、彼女においてエロスとタナトスという両極端がしっかりと手を結び、堅牢なる円環を完成しているのが見出されたのである。マンフレッドにとり悪い呪いの本質は、人間精神の根源に巣くう「生」を求めつつも、「死」をも愛さねばならない宿命であったのである。

IV

さて、エロスとタナトスによる呪縛に陥ったマンフレッドは、どのような死に方をするのであろうか。彼はアスターティによって死ぬことだけは許されるが、安らかな死に方をするわけでは毛頭ない。僧院長 Abbot of St. Maurice に手を取られつつも、むしろ彼は自らが “my own destroyer” (Ⅲ. iv. 139) となる悲劇的な死を遂げねばならないのである。何故なら彼が恋人に向けて発したエロスの衝動は終に報いられず、仮に報いられたとしたら彼はその瞬間にタナトスをも引き受けねばならなかったからである。⁽¹⁴⁾ いずれの場合にしろ、呪いの円環に捕えられている限り、彼は己の内面から込み上げてくる死の本能に導かれて、自分自身を破壊するしかないのである。そのような彼は死に際して神に祈りを捧げようとしないので、天上へと迎え入れられはしない。それどころか彼は悪魔に魂を売ってではなく、自らの学問的努力によって超越的な力を得たのだから、地獄へ連れ去ろうとする悪魔に従う必要もないのである。彼の魂は茫漠と広がる、無明の領域へと飛び去って行くのみなのである。

『マンフレッド』と類縁関係⁽¹⁵⁾にあるゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) の『ファウスト』 *Faust* (I, 1808; II, 1832) において、主人公は悪魔によって地獄へ引き立てられて行く時、神の垂直的な愛の力で天上へと招喚される。そのようなファウストと比較して、マンフレッドははるかに近代的な死に方をする。つまり『ファウスト』が墮落しつつも贖罪によって救われるという宗教的枠組に適った死に方を扱っているのに対して、『マンフレッド』はエロスとタナトスによる神経症的苦悩の内に息をひきとる近代人の死に方をテーマとしているのである。中世以来の西欧社会には『往生術』 *Ars Moriendi*

が普及していた。これは西欧版の往生要集であり、臨終の床の魂を天使と悪魔が奪い合うさまを描いている。⁽¹⁶⁾ファウストはこのアルス・モリエンディの図式に従い、地上における刻苦勲励の故に悪魔の手を逃れ、天使に導かれて昇天することができる。しかし、マンフレッドの死にはこの伝統的な死の枠組から峻別されるべきである。何故なら、彼の魂は天使が救いに来ることもなく、また悪魔が持ち去る権利もないからである。彼のおぞましい最後はエロスとタナトスによる呪縛の円環によって捕えられ、何らの宗教的救済の道も与えられない近代人の死に方を表わしているのである。

注

- (1) バイロニック・ヒーローについては、Peter L. Thorslev, Jr., *The Byronic Hero : Types and Prototypes* (Minneapolis : Univ. of Minnesota Press, 1962) 参照。
- (2) フロイトによると、自我には生命衝動（エロス）と死への衝動（タナトス）が内在している。タナトスは反復強迫として発現する。これは以前の状態の回復を試み、結局は有機体の発生以前の段階である無機物へ帰ろうとする衝動である。この件については、Sigmund Freud, 'Beyond the Pleasure Principle' in *Pelican Freud Library*, vol. 11, trans. James Strachey (Harmondsworth : Penguin, 1984) , pp. 269-338参照。
- (3) テキストは、*Lord Byron : The Complete Poetical Works*, vol. IV, ed. Jerome J. McGann (Oxford : Clarendon Press, 1986) による。
- (4) マンフレッドの心理の内向性については、J. R. de J. Jackson, *Poetry of the Romantic Period* (London : Routledge & Kegan Paul, 1980) , p. 78参照。
- (5) マンフレッドのこの鬱屈した心理を、自我が分裂した状態とする解釈については、Bernard Blackstone, *Byron : A Survey* (London : Longman, 1975) , p. 233及び Robert F. Gleckner, *Byron and the Ruins of Paradise* (Baltimore : Johns Hopkins Univ. Press, 1967) , p. 252参照。
- (6) バイロンは1815年1月にアンと結婚したが、翌年4月に離婚した。その年の7月に彼は先妻に和解請求の書簡を送ったが、拒絶され、その後には彼女への憎悪をこめ

て、この呪文を書いたのである。それ故、この美女はアンとなる。この件については、辻忠一、「*Manfred*の Incantation について」、東海大学文学部紀要13号（1970年3月）、199-210参照。尚、バイロンの結婚生活の破綻については、André Maurois, *Byron*, trans. Hamish Miles (1930 ; rpt. London : Constable, 1984) , pp. 213-35及び Bernard Grebanier, *The Uninhibited Byron : An Account of His Sexual Confusion* (New York : Crown, 1970) , pp. 197-294参照。

- (7) フロイトによると、性的衝動は対象愛とナルシズムに区別される。性的衝動自体はエロスにつながるが、ナルシズムは独立してタナトスを形成する。美女はマンフレッドの内面に帰属しているので、彼がいくらエロスの衝動を彼女に向けても、そのナルシズム性は明白である。この件については、Freud, 'Beyond the Pleasure Principle,' pp. 316-35及び 'On Narcissism : An Introduction,' pp. 65-97参照。
- (8) William H. Marshall, *The Structure of Byron's Major Poems* (Philadelphia : Univ. of Pennsylvania Press, 1962) , pp. 97-110は、美女の消失後の呪文をマンフレッドの心理的狀態と解するが、呪いの円環性については言及していない。
- (9) マンフレッドを death impulse (the id), 羚羊の狩人を restraining force (the superego) とする解釈もある。Marshall, p. 102参照。
- (10) 神経症者が過去から逃れられないことについては、Norman O. Brown, *Life against Death : The Psychoanalytical Meaning of History* (London : Routledge & Kegan Paul, 1959) , pp. 1-19参照。
- (11) Brown, p. 284参照。
- (12) エロスにおける自己と他者 / 対象との融合については、Brown, pp. 40-54参照。尚、バイロンが自然と融合したいという意志をもっていたことについては、Joseph Warren Beach, *The Concept of Nature in Nineteenth-Century English Poetry* (New York : Pageant Book, 1956) , pp. 31-44及び G. Wilson Knight, 'The Two Eternities,' in *Byron : A Collection of Critical Essays*, ed. Paul West (Englewood Cliffs, New Jersey : Prentice-Hall, 1963) , pp. 15-30参照。
- (13) バイロンとオーガスタの近親相姦の関係については、Maurois, pp. 172-78参照。
- (14) このようなマンフレッドの死に方は、至高の愛の内に死ぬ瞬間に真の自己認識を得

るというロマン主義的な愛と死のモチーフとは程遠い。この件については、ドニ・ド・ルージュモン、『愛について—エロスとアガペー』、鈴木健郎／川村克己訳（東京：岩波書店、1959年）、61-65頁参照。

- (15) 『マンフレッド』と『ファウスト』の類縁関係については、E. M. Butler, *Byron and Goethe : Analysis of a Passion* (London : Bowes & Bowes, 1956) が詳しい。特に、pp. 29-44参照。
- (16) アルス・モリエンディについては、木間瀬精三、『死の舞踏—西欧における死の表現—』（東京：中央公論社、1974年）、20-40頁参照。